



連載

ビブリオ・トーク
—私のオズメー—

… 牛田啓太 (工学院大学)

NHK 出版新書 563

試験に出る哲学

「センター試験」で西洋思想に入門する

斎藤哲也 著

NHK 出版 (2018), 860 円+税 264p., ISBN : 978-4-14-088563-5



大学入試センター試験の「倫理」。「倫理」と聞いて何を思い浮かべるでしょうか。高校で履修している・した方もいるでしょう。技術者倫理教育を受けている・受けた方もいるでしょう。研究者倫理を思い浮かべた方もいるかもしれません。

2020年の大学入試センター試験「倫理」の受験者は約2.1万人。全受験者約55.8万人の3.8%です。「地歴・公民」で受験者の多い日本史Bの約8分の1, 地理Bの約7分の1です。受験者は少ないのです。かくいう筆者も、大学入試センター試験で倫理は選択しませんでした。

この科目「倫理」には、西洋哲学・西洋思想が含まれます。本書は、古代ギリシャから20世紀前半の西洋思想を、センター試験の問題を引きつつ概観していきます。

まずは「神話から理性へ」の世界観の転換。「世界は何から成り立っているのか」の探究。そして「無知の知」で有名なソクラテス (Socrates) が登場します。紀元前400年くらいのことです。わたしたちはここで、人間社会がそこからあまり進歩していないこと、こんな昔の先哲の知見すらわたしたちに内面化されていないこと (学んでいないこと) に嘆息を漏らすかもしれません。

このあと、プラトン (Plato), アリストテレス (Aristotelēs) が登場し、批判や改良を重ねながら、世界の姿を捉えていこうとします。これに伴う彼らの考察が、わたしたちがよく生きる、よい社会を作るための示唆を含んでいることに気づくでしょう。

膨大な思索が、批判などを通じて磨かれて、時代とともに移り変わって、18世紀に「神が主役から退場」します。デカルト (René Descartes), カント

(Immanuel Kant), ヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel) らが、近代の哲学を牽引していきます。

そして19世紀も半ばになると、その思想の言わんとしていることは、わたしたちの (同時代的な) 感覚に近くなってきます。むしろ、実生活に即して捉えられるかもしれません。

わたしは、本書を通して、倫理・哲学は、世界の捉え方、ものの考え方について考えることだと諒解しています。それを知っていれば考え方とその多様性を理解し、人として「善くあること・成熟すること」への意識も高まるでしょう。さらに、内面化できれば、それを手駒として世界を捉え、考えることもできます。

先にも述べたように、センター試験倫理の受験者は少なく、本書を読めば先哲の知見や警句は思いのほか^{かいしや}膾炙していないことを知れます。時代の風雪を耐えて残った先哲の知見は、現代においてもそれを土台にして一段高い思考をせしめるものです。思考のフレームワークであり、ショートカットをもたらすものなのだと思います。そういう点で、あるいは触れることの少なかった倫理・哲学に、教養力の底上げとして触れるのは、有力な選択肢かと思えます。

わたしとしては、本書 (さらには類書) を通して、世界を捉え、考え、そして言葉として共有されたそれをその身に取り込むことは、少なからずわたしたちの世界の見え方を鮮明にし、より理知的な接し方をもたらしてくれることを、信じるところです。

(2020年10月28日受付)

牛田啓太 (正会員) ushida@cc.kogakuin.ac.jp

2005年、東京大学大学院情報理工学系研究科電子情報学専攻博士課程修了。現在、工学院大学情報学部情報通信工学科准教授。博士 (情報理工学)。